
昼寝日和でした

妖暇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昼寝日和でした

【Nコード】

N4922T

【作者名】

妖暇

【あらすじ】

「気まぐれな」何か「が気まぐれに小さな神社に勝手に住み付き、小さな願いを叶えるだけの日々を過ごすかもしれないお話。」

完結か連載かは未定です。

眠かったんだよ

ここは、気紛れなやつが神社に住み着いて、誰の願いを一回だけ聞いてくれるかもしれない小さな神社。

よく晴れた8月、小さな子供が小さな神社の噂を聞き、訪れた時のお話。

ちょうど太陽がその子供の頭の上に来たところにその少年は私の住みかに来た。

いつもは静かで、来るやつらは大抵静かに祈って帰る。

だから私はそのまま静かに過ごしている。

だけど、そいつは大声で、
しかも、私が気持ち良く寝ている時に、

「すみませーん！お願い事があるんですけどー！！」

私が気持ち良く眠っている社やしろに向かって叫んできた。

私はその声で目を覚まし、何かあったのかと思ひ外の様子を小さな穴から覗いた。

少年が何やら大きな声で願いがあると言っていた。

「僕の大事なおもちゃが遊んでたら木に引つ掛かつちゃったから木から取り返してほしいの！！」

小さな子供は、誰もいない神社に大きな声で言っていてこれ以上私の大切な安眠の時間を妨害されても困るので彼の願いを叶えた。

その願いは悪意感じないような願いでもあったしな。

私は一輪の風を彼の周りに付けた。

“そいつが風でお前のおもちゃを落としてくれる。”

私^{わたし}が子供に向かつて囁^{ささ}いた。

私の声が聞こえたのか、彼はそのまま帰って行った。

これで、またここに私の好きな静けさが戻る。

そう思っ^て私は再び昼寝をし始めた。

ああ、今日も良い昼寝日和だ。

私は社^{やしろ}の木陰から程よい風を纏い《まとい》ながら木々の間から出入りする日を嬉しく思う。

あ、やばい、猫とか雀とかいいかもしれない。

隣にいたらふわふわしそうだ。

よし、かつおぶし鰹節でも置いて見るか。

いや、またたびしかし木天蓼とか猫まんまのが良いのか…？

ああ、わからない。

まあ、また今度にして今は再び寝るとしようか。

眠かったんだよ（後書き）

さて、彼か、彼女が居たのは縁側なのか、邸内なのか、存在していることがないものを信じるのか、それとも見えるのか、わかるのか、子供だったからわかったのであるうか

実は、作者もわからんのだw

と、言うより未定w

日なたぼっこがしたい

ああ、また雨だ。

こつも雨続きだと流石に暇だ。

此処に訪れるモノがいなくなる。
きつと理由は”雨に濡れたくない”だ。

ああ、暇だ。

これ程暇ならば、場所を移ってしまおうか。
それとも何かを訪れるようにしてしまおうか。
それとも私がそちらに訪れに行こうか。

ああ、早く晴れないだろうか

それとも晴らしてしまおうか
それとも”天気”とやらをなかったことにしてしまおうか
それとも、

いや、やはり止めておこう。

暫くは雨を満喫していようか。

祝福を忘れぬように。

また消えそうにならぬように

日なたぼっこがしたい（後書き）

彼、もしくは彼女は雨が好きなのか、嫌いなのか。

雨に、人に動くモノに触れることが出来るのか、出来ないのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4922t/>

昼寝日和でした

2011年10月5日18時44分発行